

# 心温まった在宅ケア研究会

医師 三原 茂(87)

私は医者になって60年になる。治療が終わって患者さんを送るときは医者冥利(みより)に尽きる。しかしその後の「生活」に配慮が足らなかつたのでは、と反省している。

私が育つたころは「家庭死」の時代であった。戦後は「病院死」が多い。それぞれに問題があつた。今は超高齢化の時代であり、私もその真つただ中にある。現に妻は数年来、病床にある。2週間に1度の主治医の往診と多くのヘルパー、近くに住む娘夫婦一家の支えがあつて生活が成り立っている。

そんなとき長崎である集會があつた。「ホスピス・在宅ケア研究会」だ。専門を異にする医師たちの連携、それにかぶさるようにならぬ多職種間の連携が網の目のように広がつて、在宅であれ施設であれ、必要としてゐる人たちに手を差し伸べているという現況が報告された。

「目からうろこ」というのはこのようなことだろう。最後は認知症の老母を抱えた漫画家自作のスライドを見ながらフォークソング

を聞くという演出で会場は盛り上がった。大会のテーマ「そいでよかさ長崎ーあるがままに生きるための地域連携ネットワーク」で、ほのぼのとなつた2日間の集會だつた。(長崎市)